

---

# 征路陣中

霧友 亮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

征路陣中

### 【Nコード】

N9389Z

### 【作者名】

霧友 亮

### 【あらすじ】

かつて、友誼を交わした勇者と魔王。今、人の都に迫らんとする魔族の霸王と、彼の者を食い止めんとする人の英雄は、魔族の陣中にて刃を交える。

「なろう」作者・聖騎士様よりいただいたテーマに沿って執筆致しました。テーマ詳細はあとがきにてご確認下さい。

## (前書き)

「なるう」作者・聖騎士様よりいただいたテーマに沿って執筆致しました。テーマ詳細はあとがきにてご確認下さい。

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などにはいっさい関係ありません

狼煙が急を告げる、それよりも疾く<sup>はや</sup>。火勢が大地を包む、それよりも貪欲に。

魔王グンマーの軍勢が、疾駆する。

その先頭に立つは、漆黒の甲冑、漆黒のマントに身を包む、魔王グンマーその人である。抜き放たれたままの大剣はその両刃に数多の血を啜り、もはや元の色すら見て取れぬ。隻眼の大神が駆った神馬の名を冠した魔獣『スレイプニル』が、その身を紫電と為して突き進ませる。

目指すは、カナーガ。トーカンの地に覇を唱える、巨大連合国家グンタマチバラギーが首都であつた。

「トーカンの統一こそ我が悲願ッ！」

甲冑に包まれたそのおぞましい姿に反し、グンマーの声は心地よい鐘の音のように響き渡る。それはさながら、敵軍に手向けられた弔鐘のようにも思われた。

グンマーの声に、彼を必死の面持ちで追う魔王の軍勢から賛同の声が上がる。

「然りッ！」

魔王の軍勢　総勢、二万。

グンタマチバラギー常備軍三万に迫る、同連合国家設立以来、最大の魔の侵攻。

それまで群雄割拠の時代にあり、「魔王」を名乗る者が各々軍勢を立ち上げていたかつての魔軍とは違う。数世紀ぶりにトーカン全ての魔族をその実力でもって纏め上げた魔王グンマー、人の王をして「漆黒の大魔王」と呼ばしめた最大の魔。その彼が、全力で持つ破壊と戦慄の交響曲を奏でんとしているのだ。

「集え戦友よッ！　我ら魔族を貶める連合国家にッ！　我らの血の証を見せ付けてやろうではないかッ」

「然りッ！」「然りッ！」「然りッ！」

一陣の暴風となった魔王の軍勢は、阻むモノ全てを飲み込み、触れるモノ全てを駆逐して、ただひたすらに南へと進む。

トーカーン歴二〇一年。年も暮れかけた、十二の月の末のことであつた。

\*\*\*

「魔王グンマーが巨大連合国家グンタマチバラギに攻め込んで、勇者トチーギに征伐される話」

「聖騎士様ツイトよりネタ拝借」

\*\*\*

「グンマー様」

「どうしたッ、マエバツシ」

野営のテントをめくり上げ、現れたのはグンマーが最も信を置く寵臣、魔將軍マエバツシ。正々堂々たる闘いを好み、その両の刃で数多の英傑の首級を上げてきた。グンマーその人を除けば、かつて「魔王」を名乗っていた者たちと比べても見劣りせぬ実力の持ち主だつた。

「カナーガに送り出していた先陣が、思わぬ反撃に合っている由」

「闘いと言つのはいつも思わぬものだろう。見苦しく慌てるな。懐が知れるぞ、マエバツシ」

混ぜっ返したのは、魔道を操る技巧においてはグンマーすら凌ぐと囁かれる、魔道戦士タカサーキ。かつてグンマーに敗れ、最後に彼の軍門に下つた、「最後の『もう一人』」である。軍の第二位の座を巡り、マエバツシと火花を散らせていた。

「これは異な事をおっしゃるな、タカサーキ殿。闘いとは常に慎重かつ冷静に運ぶものでござる。自軍の状態を正確に把握せず、耳あ

たりの良いことだけを考えていれば、いずれ蟻に足元を救われることとなるでござるつよ」

「貴様ツ……………」

「止めぬか、貴様らッ」

グンマーの一喝に、二人の重臣は押し黙る。決して威圧的なわけではない、だが、主の言葉には一喝のみで彼らを押し留めるだけの力があつた。

「して、マエバツシ」

「はっ……………」

「あの地に我らの軍勢を押し留めるだけの力があるとも思えぬ。何が起きた？」

「それが……………勇者が現れた、と」

「勇者、だと……………」

タカサーキが訝しげな声を挙げる。

勇者。

人類の救世主……………裏を返せば、魔族にとって最大最強の害悪である。

かつて、タカサーキ自身も幾度か「勇者」に心胆を寒からしめられた。

その「勇者」が、今また現れたというのか。

「勇者、か。くく、くくくく……………」

「グンマー様……………」

突如として小さな笑声を上げ始めたグンマーに、マエバツシは小さく呼び掛ける。

「どこか、お身体の具合でも？」

そう問わせてしまう程に、魔王の笑いは危ういモノに思われた。

「くくく……………。何、気にすることはない」

立ち上がった魔王は、どこか遠くを見据えて恍惚とした表情を浮かべる。逆光になったその表情に、日頃の軋轢も忘れ、魔将軍マエバツシと魔道戦士タカサーキは顔を見合わせた。  
「もうすぐ、君に再会できるのか……トチーギ」

勇者の元へ。

カナーガへ向け、魔王の軍勢はひた走る。

そして、カナーガまであと一昼夜の距離に迫った時。

「よう。 会いに来てやったぜ、グンマー」

金の長髪を靡かせて。純白の鎧には汚れ一つなく。  
勇者トチーギが、魔王の天幕に降り立った。

\*\*\*

「なッ……貴様、どこからッ」

「見てなかったのか？ 上だよ、上」

混乱するマエバツシに、トチーギは指を上に向けてみせる。どこか飄々としたその姿に吞まれ、マエバツシは素直に上を見上げてしまった。

「！」

驚愕。

「あれは、天馬、か……ッ！」

驚愕していたのはタカサーキとて同じ。

伝説の生物。決して人に懐かぬと言われぬ、神の乗騎。

「何故貴様があんなモノにッ！」

激昂するタカサーキにトチーギが口を開きかけた時。思わぬ所から、邪魔が入った。

「はははッ、嬉しいよッ、トチーギ！ 君から私に会いに来てくれ

るとはッ！ これで迎えに行かせる手間が省けたというものだッ！」  
「グ、グンマー様……？」

突如現れた勇者に驚くでもなく、むしろ嬉しげに両腕を広げる主の狂態に、マエバツシは思わず一步退く。それほどまでに、グンマーの様子は異様だった。

「何を言っておられる、グンマー様！ こやつは『勇者』……魔族を滅ぼす仇敵ですぞッ」

タカサーキの呼び掛けもはや届かぬ。

「トチーギ、分かってくれたんだねッ！ 君が加わってくれば我が軍勢はもはや無敵ッ！ 否、軍勢など必要ないッ！ 私と君と手を取り合い、かの忌まわしき王国に彼らの墓標を打ち立ててやるのではないかッ」

「……」

グンマーの呼び掛けに、トチーギは答える素振りすら見せぬ。そして、マエバツシは魔王のあまりな言い様に絶句を余儀なくされていた。

「おいおい、何言ってるんだよ、魔王。俺は勇者でお前は魔王。殺し合うのが摂理だろう」

「こやつ……魔王グンマーを誑かし、尚且つ愚弄するかッ！」

痺れを切らしたのはタカサーキ。両の手を素早く交差させ、複雑な文様を描き出す。触れたもの全てに暗黒の刻印を為す、タカサーキの壱の秘儀

「ガアアッ！」

魔力の収束しかけたその両腕を、突如として一閃の斬撃が通り抜けた。

赤い、赤い、無慈悲の一撃。

「グ、グンマー様……何、を」

「五月蠅いぞ。私がトチーギと話しているんだ」

「ギイヤアアアッ」

再び振るわれた一閃に、タカサーキは断末魔の一声を上げて倒れ



伏す。

あまりのことに、マエバツシは物言わぬ彫像となることしかできなかつた。

「忘れたのかい、トチーギ。私と君の約定を。幼き日々の友愛を。かつて契つた将来を」

「忘れてはいないさ」

「ならば、何故そんなことを言う？」

「それが『勇者』だからさ」

「トチーギッ……！」

悲嘆のような魔王の声。

その頬を、一筋の光が貫いた。

噴き出る血は、赤。

「何、を……？」

「次は直撃させるぜ、魔王」

トチーギの手には、いつの間にか細身の剣が握られている。

勇者に託された、三種の秘宝。

即ち。

天馬。

白き鎧。

そして、光放つ聖剣。

その一撃を受けて、グンマーは何かを悟つたようだった。

「言つても分かつてもらえないんだね、トチーギ」

「愚問だな。……グンマー」

「良いだろう。ならば」

魔王もまた、その赤き大剣を両手に掴む。

漆黒の鎧が夜を映し込んで怪しく輝く。

「往くぞ勇者ッ！ 理想を捨てたお前と、現実に抗う私とッ。どちらが世界の覇者たるか、この一戦にて問おうッ！」

勇者は無言で剣を構え直す。

雲が、満月を覆い隠す。  
夜が、二人の間を埋め尽くす。

勇者が、跳ぶ。

振り下ろした神速の斬撃。否、もはやそれは「斬撃」などではありえない。「速い」という次元を既に超え、それは動体ではなく存在へと昇華されている。

「斬撃」ではなく、「斬」。

「斬る」と思ったときには、既に「斬れている」。

勇者トチーギがその腕によって鍛え上げ、磨き上げ、到達しえた究極の域。

「面白い……ッ」

細身の聖剣と両刃の魔剣が絡み合い、傷付け合い、この世ならぬ殺戮の楽を奏でる。打ち合うこと数合、巻き込む風は嵐となり、噴き出す火花は業火となって、二人以外の何者をも受け入れぬ。

魔將軍マエバツシですらも。ただ唇を噛み締め、己が主の勝利を祈って待つしか許されない。

そう、その時既に。

マエバツシは主の勝利を「確信」ではなく「願って」しまっていたのだ。

達人である彼の眼には、あるいはその先の趨勢まで見えていたのかも知れぬ。

一〇分の一、ではない。

一〇〇分の一、ですらない。

一〇〇〇分の一、あるいは一〇〇〇〇分の一。

(グンマー様が、僅かに押されている……ッ!?)

そう、彼が戸惑ったとき。

ニヤリと。

魔王が笑ったのが見えたように思われた。

「もう、手加減は無用だな？ ……勇者ッ」  
「！！！！」

迸る魔力の噴流。魔族故の強大な魔道。人の身で扱える超常の力を遙かに超えた、人ならぬ身の上に許された破壊の波濤。

闘いの道行きは、剣戟のみにて決まるにあらず。

斬撃に漆黒の魔力を乗せて。紫電の闇より冥界へと通ず扉を開く。

魔王を魔王たらしめ、タカサーキらかつての魔王を尽くその足元へ沈めてきた、純粹なる「力」。

勇者のソレが「究極の域」、突き詰めたが上の極限ならば。

魔王のソレは「超越の域」。何者も届かぬ、境界の遙か上を往く。「滅びろッ、トチーギイツ！！」

その技に名などない。何故なら、それを語る必要がないからだ。

それを継ぐ者も、眼にする者も必要ない。ただ、「魔王グンマーの力」として存在するのみ。

漆黒の雷雲がトチーギを包み、無数の槍穂がその身に突き立って

「……何？」

「なッ……！！？」

細身の聖剣が、魔王の首元に添えられた。

短くも、永遠と思えた闘いの、それはあっさりとした終局だった。

\*\*\*

「残念だよ、かつての友とこのように決着を付けなくてはいけないとは」

かつて。トチーギとグンマーはグンタマチバラギで出会った。

トチーギは隣国の人の子の代表として。グンマーは魔の子の代表として。二人はカナガにある、ハイクラスの子息子女向け教育施設「学園」に所属していたのだ。言うなれば、体の良い人質という

ことだった。

同じ立場であった二人は、その身に流れる血の違い故に傷つけ合うこともあったけれど、やがて無二の友となり、約定を交わしたのだ。

曰く。

「いずれかが自由を求めるのなら。もう一方が全力でそれを支援する」

と。

「お前が自由を求めるなら、俺はそれを支援する。だが、お前がやっていることは征服だ。それを自由だと、俺は認めん」

「ふん……随分と饒舌じゃないか、勇者。割り切れていなかったのは私だけではないらしい」

「まあ、そうかも知れんな」

首筋に添えた剣先を小揺るぎもさせず。

勇者と魔王は、静かな会話を交わす。

「勇者。一つ、頼みがある」

「……俺に、叶えられることなら」

「私を殺したら、この場を引いてくれ。どうせ私が死ねば、魔軍は瓦解する。また人の都に進軍できるようになるまでには、長い時間がかかる」

「……分かった。我らの、幼き日の約定に敬意を評して」

「……礼を言う」

一つ息を吸った魔王は。

「マエバツシ！」

固まったまま動けないでいた、己の寵臣に呼び掛けた。

「魔族を、頼む」

「……はッ」

「勇者を恨むな。まあ、難しいかも知れんが……。これは、我らの伝統というものだ。良きにつけ、悪しきにつけ、な。……だが、一

つ言わせてもらえれば。いつか、魔王マエバツシが魔族を率いる時が来たならば。また、違った魔王と勇者の関係が生まれるのかも知れない。そう願うよ」

それが、魔王グンマーの最期の言葉となった。

\*\*\*

トールカン歴二〇一一年。年も暮れかけた、十二の月の末。

魔王グンマーの軍勢がグンタマチバラギの首都カナーガに迫った。

勇者トチーギの活躍により、人類の滅亡は未然に防がれる。

そして、主を失った魔族たちは、再び戦乱の渦に置かれることとなった。

この魔族の暗黒時代は、後に魔王グンマーの寵臣、魔將軍マエバツシが主の意を継いで統一を成し遂げる迄、十数年の長きに渡って続くこととなる。

(つづかない)

(後書き)

「魔王グンマーが巨大連合国家グンタマチバラギに攻め込んで、勇者トチーギに征伐される話だれか書いてください。」

……そんな、聖騎士様の冗談ツイート(?)をガチで受け止めて生まれた作品です。お楽しみ頂けましたでしょうか？

念のため、もう一度。

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などにはいっさい関係ありません

ぶっちゃけますと、カッコいい戦闘シーンとカッコいい語りを入れてみたかった、というだけの内容です(笑)

勇者が魔王をぶっ倒す、だとうまくまとまらなかったので「かつての友」という設定を付加したりしてみました。実際(以下自主規制)

内容はシリアスです。……シリアスです。

たぶん、日本人以外が読んだら普通です。きつと。

勝手に執筆したにも関わらず、快くテーマご提供・掲載許諾を下された聖騎士様に心からの感謝を。

ご意見・ご感想・次回の執筆テーマ(!)、ぜひお寄せ下さい!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9389z/>

---

征路陣中

2011年12月29日12時48分発行